第一回

■日 時:令和3年12月8日(水) 12:45 開場 / 13:30 開演

■会 場:紀尾井小ホール

■主 催:一般社団法人長唄協会



出	
演	
者	

出曲者 出曲者 出曲者 出曲者 出曲者 出曲者 を なかつき 思破車 作調 藤舎 呂 英 作調 藤舎 呂 英 作調 藤舎 呂 英 **今様 小道** 作調 堅田 新十郎 作調 堅田 新十郎 **教** 作調 福原 徹 彦 英 作調 福原 百之助作調 福原 百之助作曲 東音 都築明斗作品 東音 都築のとれ 作調 藤舎 呂 勝四郎郎 英田郎郎 者 松永忠一郎 杵屋 勝四郎 今藤 政十郎 藤舎 呂英 東音 赤星喜康 今藤 美治郎 東音 都築かとれ しゅつじん **陣** しゅうぎが あ つもり **盛** おにきり 東音 都築明斗 東音 唄東音 東音 富士 東杵音 杵 松 東音 東東音音 東音 屋 屋永 田 小島英裕野口悦至 大島早智 西垣和彦 伊藤薫子小林百合 伊藤薫子 巳之助忠次郎 蔵 三 味 令 杵 杵 三味線今今 三味線 三味線 三味線東音 三味線 東音 藤藤藤 笛福 東音 松松 東杵音 松今 今 東音 東音 藤藤 永永 永藤藤 藤屋屋 原 舎 舎舎舎 版本剛二郎 赤星喜康 都築明斗 都築かとれ 忠三郎忠一郎 忠三郎政十郎 政十郎 龍十郎 小三郎 徹英呂夏呂 彦心近実英 打ち物 望 笛 藤住 甘福 藤藤 堅望望藤 囃子 ^笛福藤 福堅堅 竹藤 原舎月 原原原原 井舎田月月舎 聲月原田田 原舎舎 聲舎田 英昌太喜之 太喜之丞 宏之 武之 英 晴 太鶴昌 新十郎 清太津 寛之之 百鶴遊百之助馬 馬助 晴英福十 次 心 夏呂 寬実英

鳳 望

出曲者 杵屋 勝四郎

作作作 調曲詞 藤杵紅 舎屋 呂勝吉

四三 英郎郎

3

くらぶればて兵を進め 佐々政次 たり 出 その数二万五千 その後南に陣照寺に入り その数およそ三千余りへ頃は永禄三年五月の方 尾張の国 もはやこれまでと 思いける 夢幻のごとくなり 義元に奇襲をかけよ て三千余り 義元率 尾張の国桶狭間 折しも雨の降り来るに 出陣 人間五十年 鳴海城を囲む砦 これに乗じ 下天の内を

尾張国知多郡桶狭間での織田信長軍と今川義元軍の合戦における出陣式。

出曲者 東音 都築かとれ 東音 都築明斗

切

作作作作 調曲曲詞 福東東海 原音音野

五条の橋まで送りて給ひなんや」と申しければ、綱は「御馬に召東の爪に齢二十余りと見えたる女の「やや、何処へおはする人ぞ。ろに馬の音の他に音は無し。一条堀川の戻橋を渡らんとする時、七寸の太刀鬚切を帯かせ、洛外を後に一路洛中へ向ふ。草木も虚の綱。夜陰に一条大宮を出でて、馬に乗り頼光公から賜りし二尺の綱。夜陰に一条大宮を出でて、馬に乗り頼光公から賜りし二尺 正親町丸太町虎屋町と行き行きて五条の橋を渡り終えたる。をかき抱きて馬に打乗らせて一条戻橋より五条の方へ向かひに、され侯へ」と言ひければ、「悦しくこそ」と言ふ間に、綱は女房 夜陰に一条大宮を出でて、 緑と義理 摂津守頼光に頼 落ちてたてがみ乱す比叡おろし 摂津守頼光に頼まれし用事終えたり四天王随一てかみ乱す比叡おろし、京の辻は十文字、刀で切 百都築かとれ りまれ りまれ

七のれべす綱ぬ日

゜はは

たりければ、頼光大きに驚き給ひて、後に髭切を鬼切に改めたる際なく生ひ繁り銀の針を立てたるが如くなり。これを持ちて参りにも、五尺八尺と地を離れること数十尺。綱は少しも騒がず件の提げて飛び行きける。「やや、これ宇治の橋姫なるか」と覚ゆ間ざ、我が行く処は愛宕山ぞ」と言ふまに、綱がもとどりを掴みてざ、我が行く処は愛宕山ぞ」と言ふまに、綱がもとどりを掴みて 生やし、顔には朱を指し、身には丹塗る怖しげば何処へ行かん」と申して女をうち見ると、 それ迄送りて給ひなんや」と申しければ、「承り侯ひぬ。さあらこの女綱へ見向きて、「誠には我が住所は都の外にて侯ふなり。 となむ言ひける。 し、顔には朱を指し、身には丹塗る怖しげなる鬼になりて、「処へ行かん」と申して女をうち見ると、にわかに五つの角 を

ムで、それぞれ調べていくうちに、今回の題材で作曲意欲が湧きました。

出曲者 藤舎 呂英

調調

徹呂

創作意図 て表現することを試みます。 況に「助けられないならせめて自らの手で」という想いの葛藤や心理描写を邦楽囃子によっ 景と共に、直実の「美しい若者を助けてやりたい」という想いと、助けることが叶わぬ状 子のような敦盛と、生粋の坂東武者である熊谷次郎直実の物語です。今回は物語の時代背 祖父、忠盛が鳥羽院から賜った名笛「小枝」を代々受け継ぐ笛の名手である平安朝の貴公 平家物語などに取材した能の人気演目の一つ「敦盛」。作者は有名な世阿弥です。敦盛の

出曲者

烏 獣

作作作 調曲詞 住今千 田藤野 福政喜

みじ狩 杉の緑と綾なして 色あでやかな景色かな 急ろうと存じます」へ時しも頃は神無月の中なれば 行く巻 鳥獣戯画を拝見する許しを頂いたによって 急ぎ高学僧 「これは仁和寺の学僧にて候 この度 洛西栂尾高 の尾の 高山寺にぞ着きにけり ・、よ 急げば程などは 行く道筋のもで 急ぎ高山寺の絵西栂尾高山寺の絵

学僧 老僧静々立ち出でぬ 物申案内申」、物申の声に応えて墨染の、衣ずれ「これは早、お茶で名高き高山寺、先ずは声を掛 の音すり きょう 足物。

学 僧 学僧 「これなるは お目通し下され」 お願いあって罷りし者に和寺よりの書状

奔放自在の筆勢に 明なほう とおら紐解く絵巻物 ちゃれ」 へややあって和寺殿よりとあれば 心 どうじゃなんお猿 的はでっかい蓮青葉 蛙がキリリと弓引きざる言わざるを、暫し決め込み無我の境岩の上、襖の後か毛繕い、心地良さそに 目はうしろ お方の藤袴 「ハテ 襖の後か毛繕い、心地良さそに目を細めった、、、始めの絵柄は谷川で、楽しく泳ぐ猿、兎一切文字がないのも稀有な、ハテサテハテサ狼、白兎、馬の代りの鹿などが、ヒョッコリ どこへ行ったか蓮の的 仁和寺殿よりの書状とはいかめしや に 眼見開き息を詰め 墨絵の戯画に魅せらるる誰が画いたか分からねど 絵筆の流れ冴え渡り巻物 戯れ絵スルリと現れ出でベサテ サテくく 紫白う桔梗花 いとしと愛でたる撫子を 蛙がキリリと弓引き絞り 鳥獣戯画の絵巻を見せて下されい 心得申した 箱に納まる絵巻物へ箱を畳に直し置き、得申した 庫裏でチンと座してお待っ 面白や 白や へさっても事件か大変撫子を 育て上げなん女郎花の へ秋の野に咲く七草は 誰 へ次なる絵柄は弓競べに目を細め 見ざる聞かく泳ぐ猿 兎 親玉猿かテサテハテサテ こりゃテサテハテサテ こりゃヒョッコリ ヒョコへ動 スックと立てば 何々 とナ これな っ仁

は、通う秋風散るもみじ、お茶一服とすすめらる、名画の後の栂巻、、鳥獣戯画の一巻を、鳥獣戯画の一巻を、鬼終えて憩う縁先れた大蛙、そやつの法事じゃあるまいし、何ともふざけた戯画絵が口りと投げ飛ばす、、南無阿弥陀ン仏、南無阿弥陀、、須弥壇組む兎と蛙の力士、蛙の内掛け耳噛り、反則技も何のその。兎を組む兎と蛙の力士、蛙の内掛け耳噛り、反則技も何のその。兎をも、安じらる、、こちらの原では兎と蛙、力競べか大相撲、取りも、安じらる、、こちらの原では兎と蛙、力競べか大相撲、取り も 安じらる がん はい腹出れ 尾銘 系 系 系 、 至福の時をぞ過ごしける 近げる怪しき猿を吸出し仰向けに し仰向け 逃げ行く猿を捕らまえろ ひっく 鬼と蛙が見咎めて り返った大蛙 至福の時をぞ過ごしける 事件の後前知らねどめて 捕らまえろ ソた大蛙 心配顔の兎た

創作意図

です(笑)しかしながら初めて〝作曲〟と言う事に触れた処女作でありますのでお聞 も弾けそう」とか「私でも唄えそう」と思って頂けたなら、まさに〝我が意を得たり〟 と思われがちな古典芸能、ましてや難しそうと思われがちな新作です。「これなら僕で 古典的な旋律と唄いやすく楽しくに主眼を置いて作曲致しました。とかく敷居が高い 者の心の声が聴こえて来る様です。この様に様々な解釈がある鳥獣戯画ですが、曲は 生き物達はこんなにも自由なのに現実社会の我々人間の何とも窮屈な事よ〟という作 アンチテーゼが込められている様に思えてなりません。端的に言えば、〝絵巻物の中の がある」と言う人もいますが、私的にはこの甲巻に関してはその当時の社会に対する や獅子など)が出て来たり秘物とされていた点などから「何かしらの宗教的意味合い ある人はこの甲巻を見て「日本最古の漫画だ!」と言う人もいれば、後に霊獣(麒麟 若き学僧と案内する老僧の二人によるストーリーテラー的な展開となっております。 戯画であるが故、ストーリ 甲乙丙丁の四巻のうち、兎や蛙、猿などが擬人化された甲巻を題材としました。本来、 京都高山寺の秘物、鳥獣戯画。コミカルに描写された生き物達は躍動感に溢れています き苦しい点など多々あるかと存じますが御容赦頂ければと存じます。 - 性はないのですが作詞の千野先生に発案頂き、絵を学ぶ

衣かつき思破車

作作作 調曲詞 初代

きとくちくせに おもふもあだになさせじと そのむつごとのかずきとくちくせに おもふもあだになさせじと そのむつごとのかずに はなれしやれ車 かわいといふてくれか、る 鐘もかすかにひびにはなれしやれ車 かわいといふてくれか、る 鐘もかすかにひびにはなれしやれ車 かわいといふてくれか、る 鐘もかすかにひびんなり にくひにくひはかわいのうらよ ないておとすだささでおこふかと うらみのねんりきくろがねののめをとぎたてはがみをなせば あなたへはらい こなたへきへのつめをとぎたてはがみをなせば あなたへはらい こなたへきへのつめをとぎたてはがみをなせば あなたへはらい こなたへきへのつめをとぎたてはがみをなせば あなたへはらい こなたへきへのつめをとぎたてはがみをなせば あなたへはらい こなたへきへがわれおそる、おくるまの めぐるみんぐわはくるしき此身にはおそわれおそる、おくるまの めぐるみんぐわはくるしき此身にはおそわれおそる、おくるまの めぐるみんぐわはくるしき此身にはおそわれおそる、おくるまの とれんのこふりにうちしづむ あわれみいまとれれしもみだす みだれがみ はらりはらいかできないがよいないというによりないがある。 苫屋のあきふけて うづら鳴さへわしや気にかかる きはことばの花ならし にあらわれ はかなくなりしそのうらみ はらさんためにせいなくも 過ぎしころ しき ういてんべんの有様に 色にひかれかればとよ 一心は 鏡のおもてにたとへたり きたりしなり われをあだとてむごらしく そのよすがらも くどくどくどと へ花咲て 散事なくは世の中の その浮雲の りんきりん いなづま うらの かり

う

語るもつきぬおそろしや

した。ただし元の通りのものを作るには、どんな曲調であったのかなど詳しい検証が必要なのたものもたくさんあります。それらを再び長唄として蘇らせたく、今回この作品に挑戦しま ですが、今回はこの詞章を使った創作ということで、そうしたことはある程度踏まえつつも、 自由に作らせていただきました。 長唄には数多くの名作が残されていますが、残念ながら曲は絶えてしまって歌詞だけが残っ

わかり易くて楽しく聴ける様にと、昔話を題材にして作曲しました。気軽に楽しんで頂けれ

出曲者 東音 赤星喜康

堅東か 田音ず

菌という虫 人の生活をこわすマスク、マスク、マスク 天災人災弱肉強食 自然の摂理 されど食うは人、人、人 現在はびこる道 鳥の啼き声 虫の声 獣の道に川の魚 山紫水明 その中でら この命終わるとも この命終わるとも へ生まれ落ちたは畜生く この命終わるとも この命終わるとも へ生まれ落ちたは畜生なし 蹴散らし蹴散らし切り開く 騎虎の勢 乾坤一擲 邪魔すなし 蹴散らし蹴散らし切り開く 騎虎の勢 乾坤一擲 邪魔す ら輩は許すまじ、親子といえども許すまじ、血で血を洗う阿修羅の如なし、蹴散らし蹴散らし切り開く、騎虎の勢、乾坤一擲、邪魔する。狂い咲き、果ては乱れ死に、ヘヤレ修羅道は、己の前に道は嗚呼情けも過ぎれば仇となる、人間世界は裏表、〈冫 き流れ 見鶏 の下 れて いずれなるや とられて の舞のやすらぎも へ彼岸此岸の道標 ころげころげて人間界 へ生・老・病・死 四苦八苦 恐れおののく 骨と皮なる餓鬼の道 地位と名誉の欲ぶとり 心は細る身も細る たらふく食らって 何処へ 死して屍 愛別離苦 地震 台風 はたまたテロに戦争 緑なす山 己と他人 他人と己 嗚呼情けは人の為ならず 人もまた自然の中に巣食う生きもの ・・・地獄道その身は無我 妖しの匂ひに 瞼開けば ただれくず救い給えや六地蔵 瞼閉じれば天上界 怨憎会苦 悟りの道はほど遠く 正義、正直、政治理念はどこ吹く風や風 生まれ落ちるも去る時も 求不得苦 べ等括地獄 黒縄地獄なおも欲に憑りつかれ 下界のぞけば女人の姿いば ただれくずれし形 五蘊盛苦 皆ひとりの 毒饅頭に袖 からめ

三枚の

作作脚 調曲色

でいわ尚 小さに大水を飲み干したり「これはたいへん 大火をすて「大水 出ろ」とたんに大きな川流れ 山姥の行く手を阻むるみる口裂けて 音を蹴立てて小僧を追えば 小僧は次なるお札をだ」と答えける こらえきれずに力まかせに縄引した 何も知らない山姥は した 何も知らない山姥は した でした でした からない山姥は した かまかせに縄引し ら それ う じゃが 小さいものには化けられまいのう|「どうだ」と言ってれっと化けたのは 雲つくほどの大入道 「ほう たいしたもんだがでも化けるそうじゃのう 大きなものには化けられるかの」 山姥僧を出せ」と凄みしを よう来た上がれと和尚様「ときにおまえは!僧を出せ」と凄みしを よう来た を一枚貼り付けて、おれの代わりに返事を頼むと拝んでおいて逃げ出三枚あったよな、小僧はこっそり腰の縄を厠の柱に結わえ付け、お札―そうだ、もしもの時には頼むがいいと和尚様からいただいたお札が早く行け」厠の中で小僧はしきりに考えた「もうすんだか」「まだだ」 とかせねばと山姥に「ばさま「わしは厠に行きたくなった。行かせて飛び起きしが 「見たな小僧」逃がさんぞ」 驚き脅える小僧さん 何 ら現れたり こりゃありがたや づけばとっぷり暮れにけり 「もし小僧さん 暗くなるまで精が出戻らぬと 山姥現れ喰われるぞと 和尚に言われていたなれども秋の山 色とりどりの錦なり 小僧は山へと栗拾い 日暮れまで くれろ」「ううむ そんなら腰に縄つけて 炉裏にあたるそのうちに それをつまんで 焼きたての餅にくるんで 一口に食べにけり 光映して刃を研ぐは「誰そ」正体現す山姥なり「小僧はいあたるそのうちに」こくりこくりと寝始めた「夜の夜中 小さな小さな豆のつぶ すさな小さな豆のつぶ 和尚様 どれどれ見事と言いなが小さいものには化けられまいのう」「どうだ」と言って化 しが宿貸そうよ」言う声優しき老婆の姿 小僧はちょこちょこついてい わしがずっと持っていよう たいしたもんだがの 小僧ははっと の月あ 出るの

罪地、默獄 である為に しばし 六道巡りをごろうぜよ 伝え伝える 唄のも 今は昔に然に非ず 手本を示し 筋目を通す人の道 人が人え 助け給えや六地蔵 今も昔も人の性 変わらぬものと思えど湯 血の池 針の山 突き刺す 突き刺す 八咫烏 へ救い給罪、罪 赤鬼 青鬼 金棒ふりあげ 追い落とす追い上げる 熱罪、罪 赤鬼 青鬼 金棒ふりあげ 阿鼻叫唤 大叫唤 焦熱 金棒ふりあげ 焦寒 大焦熱に無間地獄は へ救い給 熱

もありましたーいわば人間の弱き心に焦点を当て、そして範を示し、筋目を通すのが正し 変わる―この新型コロナ感染症の大きな影響の元、様々な人間の心の部分を垣間見ること 大きなテーマを「相対」とし、仏教世界で六道を輪廻する人間の心の葛藤、対立を描きま き人間の道と結びました。 した。裏切りや妬み、欲望、恐怖など人間を取り巻く様々なことで六道のどこかに生まれ

長唄協会創作の会 委員会

[調整委員]

[実行委員]

杵 今屋 藤 芳村 呂佐長伊 十十 船吉郎郎

千 太岩 直 美治 穂 之 喜光 吉郎 美子